

# 既存のツールをつかって 「フィールド」と「教室」をつなぐ： アクティブ・ラーニングの実践

2014年度の開講以来、アクティブ・ラーニングを重視した授業を行っている島崎裕子准教授の「グローバル化と国際協力」。学生たちが生きた学びをより深めていけるようにと、授業にさまざまなツールを取り入れている。「わせポチ」をはじめ、PowerPointや書画カメラといったツールの独自の活用方法について聞いた。



島崎 裕子  
社会科学総合学術院 准教授

## 生きた情報を伝え、学生たちに考えさせる アクティブ・ラーニングがメインの授業を展開

「グローバル化と国際協力」は、全学部全学年を対象としたグローバルエデュケーションセンターの科目だ。人気が非常に高く、毎回、線外（履修不可）となる学生が多数であるため、単位取得にならないが希望学生も多数参加する状態にある。本科目ではグループワークやディスカッションなど参加型のアクティブ・ラーニングを授業のメインとしているため、対応できるのは60人前後が限界だという。「基本的には、やる気の高い学生が多い傾向にありますが、参加型ということであることが多く大変そうだと、最初は引き気味の学生も一部いるようです。ただ、どんな学生であっても前のめりになって参加してくれるような授業にするよう工夫することが、教員の仕事だと考えています」。

学生にやる気を起こさせるために島崎准教授がまず重視しているのが、生きた情報を伝えることだ。「私自身、多くの開発途上国に足を運んでフィールドワークをしているので、授業の中では実際の経験を語っています。生の情報だからこそ、学生も興味を持つのだと思います。また、単に教科書を読むような授業ではなく、実例を多く取り上げて学生たちがそれについて自分たちで考えたり、話し合ったりする機会を多く設けるように心がけています」。

グループ・ワークやディスカッションが多いため、できるだけ設備の整った教室を利用したいと考えている。「最も望ましいのは机や椅子が可動式のクラスです。今後、ホワイトボードに書いた情報を直接データ化することが可能な通信環境も充実しているクラスが増えることが望ましいと考えます。これらの教室は人気があるので必ず使えるとは限りませんが、椅子が動かせることは必須です」。ちなみに、教卓が一段高いところにある教室は使わない。「教員と学生の席の高さに差があるような教室は、アクティブ・ラーニングには不向きだからです。教壇がある場合は、教員は教壇から降り、学生の周囲を回りながら、意見を聞いたり、マイクを回すなどして授業を展開しています」。

## Web版クリッカーの「わせポチ」は 学生のタイプに合わせて利用を検討

2014年に科目がスタートしたときから、アクティブ・ラーニングを重視した授業をしていた島崎准教授だが、さまざまなツールを授業で使うようになったのは、2015年に参加したワシントン大学でのFD（ファカルティ・デベロップメント）研修がひとつのきっかけになったという。「先進的なツールだけでなく、PowerPointやOHP（オーバーヘッドプロジェクター）といった既存のツールを活用することもICT教育だと強調していたことが印象に残っています。そして、FD研修で得た知識も参考にして、どんなツールをどのように使うのが効果的なのか検討するようになりました」。

Web版クリッカーである「わせポチ」は、主に、グループ・ディスカッションの際に活用している。「たとえば、『わせポチ』のコメント入力機能を使って、各グループから出てきた意見を書き込んでもらい、それを見ながら議論をするといった使い方をしています」。また、授業の理解度を確認するために、4つ程度の選択肢を用意してクイズ形式で回答を求めることもあるという。

「わせポチ」を利用するメリットとして、島崎准教授は授業へのより積極的、能動的な参加を挙げる。「自分がBという回答を選んだら、リアルタイムでそれが画面に反映されます。『B』を選んだ何人かの中に自分も入っていると思うと、それは自分に関わる問題になるので、授業に対する意識が変わってきます」。

ただし、島崎准教授は常に「わせポチ」を使うことが常にベストではないともいう。「どんどん手が挙がって回答するような学生が多ければ、わざわざ『わせポチ』を使う必要はないからです。ICTツールありきではなく、学生のタイプや興味に合わせて適切に使用することが重要だと考えています」。また、通信環境やシステムの仕様の問題で、回答をしてから表示されるまでにタイムラグがある点も「わせポチ」の短所だと指摘する。「以前、クラス全員が一斉に回答したら、途中で2回ほど表示が止まってしまいました。『わせポチ』の結果をもとにディスカッションをしようとしているのに、勢いがそがれたと感じました。もちろん、『わせポチ』には前述のとおりメリットもあるので、いつどのように使うのが効果的なのか、教員側の柔軟な対応が求められるのではないのでしょうか」。



## PowerPointのレイアウト機能を使って グループ・ディスカッションを活性化

島崎准教授の授業では、PowerPointもアクティブ・ラーニングに欠かせないツールとして積極的に活用している。「授業で使用するレジュメをまとめるといった通常の使い方もしていますが、それだけではなく、ディスカッションで出てきた学生の意見や発表内容を、その場でPowerPointのシートに書き込んでいます」。

具体的には、PowerPointの「レイアウト」で1枚のシートが左右2つに分かれる「比較」というテーマを選び、たとえばある問題について「賛成」と「反対」のどちらかに分かれて、それぞれのグループの意見を入力していく。「挙手をして意見を述べたら、入力自体はTAが行います。プロジェクターで投影されているPowerPointの画面に『賛成』派の意見が表示されると、それを見た『反対』派が今度は別の意見を述べて、またTAが入力してそれが表示されます。自分たちの意見がすぐに表示されることで、議論がより活発になるという効果があり、非常にインタラクティブです」。また、作成したPowerPointのシートは後でCourse N@viにアップして、復習の教材として使用する。「わせボチ」でも意見を書き込むといったことは可能だが、「『わせボチ』だと賛成・反対を聞く設問と、意見を書いてもらう設問は別の画面になります。PowerPointなら、一枚のシートにまとめて書き込めるので、流れを止めることがないのがメリットです」。

また、PowerPointにあらかじめ用意されているチャート図を使って、途上国が抱えるさまざまな問題の優先順位をつけさせるといった使い方もしている。「学部生の場合、その場でゼロからチャートを作るのは大変ですが、PowerPointのチャート図を使えば取り組みやすくなるといった利点があります」。

さらに、実際のモノをスクリーンに投影できる書画カメラも、よく使うツールの一つだという。具体的には、フィールドワークで入手した資料の現物、たとえばカンボジアの貧困地域の女性が作った雑貨や人身売買の注意が書かれたリーフレットなどを学生に見せるときに使っている。

「もちろん、現物を回して手に取って見てもらうのが一番よいのですが、人数が多いとそれも難しい。かといって、画像をスライドで

見せるだけでは単なる資料でしかありません。書画カメラなら実際のモノを見ている感覚があるので、リアルな学びにつながると考えています」。現物を見せる以外では、前述の貧困地域の女性が雑貨を作る様子を現地に行った際に動画で撮影し、授業でそれを見せることもある。「現物を見ることももちろん重要ですが、作っている人を見ると、モノと生産者が結びつき、開発途上国の問題をよりリアルに感じることができるからです」。

島崎准教授は、ほかにもホワイトボードを使ったり、ときには模造紙にマジックで書き込んだりなど、さまざまなツールやその活用を授業に取り入れている。「重要なのは、あくまで効果的な授業のために適切なツールを使うということだと考えています。最先端のものを導入することが教育ではないし、それで学びが深まるわけではない、ということは強調したいです。最先端の技術と従来からある方法の双方を生かしながら、授業をより効果的に展開していくことが必要だと考えます」。

## 開発途上国と教室をネットで結び、 より深い学びにつながる授業を行いたい

今後は、開発途上国のNGOなどと教室をインターネットで結び、現地の人と対話するネットワーク型授業を行うことにも取り組んでいきたいという島崎准教授。「たとえば、現地のNGOや子どもたちが画面の向こうにいて、Skypeなどを使って実際に彼らとやり取りができれば、非常に臨場感があるし、学生たちの心にも残ります。彼らの学びをより深めることにつながると考えています」。

実は、ネットワーク型授業を一度試みたという。しかし、通信環境やデータ負荷などの問題があり、途中で電波が途切れてしまったそうだ。「インターネットに関しては、日本側だけでなく相手先の通信インフラも関係してくるので難しいところもありますが、意義と効果は大きいと思うので引き続きチャレンジするつもりです。また、インターネットを通じて日本と交流を持つことは、現地の子どもたちにとって世界観を広げるいい機会になるのではないのでしょうか」。

今回紹介した様々な方法は、社会科学部の英語単位プログラム（ソーシャルイノベーションプログラム：通称TAISI）で島崎准教授が担当する科目でも応用展開されるという。